

八亀徳也教授 略歴および研究業績

略 歴

- 昭和19年 4月25日 大阪府に生まれる
- 昭和38年 3月 大阪府立四條畷高等学校卒業
- 昭和38年 4月 京都大学文学部入学
- 昭和42年 9月 ドイツ留学（サンケイスカラシップにより；グラーフラー
ト・ゲーティンステイトゥート、マールブルク大学）
～昭和44年 3月
- 昭和46年 3月 京都大学文学部文学科ドイツ語学ドイツ文学専攻卒業
- 昭和46年 4月 京都大学大学院文学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻修
士課程入学
- 昭和48年 3月 京都大学大学院文学研究科ドイツ語学ドイツ文学専攻修
士課程修了
- 昭和48年 4月 関西大学文学部助手
- 昭和51年 4月 関西大学文学部専任講師
- 昭和54年 4月 関西大学文学部助教授
- 昭和61年 4月 関西大学文学部教授
- 昭和62年 4月 関西大学在外研究員（ビーレフェルト大学）
～昭和63年 3月
- 平成14年 4月 関西大学入学試験部長 ～平成15年 9月

研究業績

著書

- ドイツ市民劇研究（第二版：十八世紀ドイツ市民劇研究） 三修社 昭
和61年 6月（1986）共著
- 国境なきヨーロッパ―文学と思想における異文化接触の形― 関西
大学出版部 平成22年 3月（2010）共著

学術論文

- 若き魂の叫び—『群盗』についての一考察— 関西大学文学会『関西大学文学論集』第24巻第1号 昭和49年12月(1974)
- › Der Verbrecher aus verlorener Ehre ‹ von Schiller — Ein Interpretationsversuch nebst einem Einblick in die Quellen — 『関西大学文学論集』第25巻第1・2・3・4合併号 昭和50年11月(1975)
- 流浪のシラー、シュトットガルトからライプツィヒまで(伝記の試み) 関西大学独逸文学会『独逸文学』20 昭和51年3月(1976)
- Versuch über Schillers › Don Carlos ‹ — besonders in bezug auf die Tragödie Phillips II. — 『関西大学文学論集』第28巻第3号 昭和54年2月(1979)
- J. M. R. レンツの演劇論、› Anmerkungen übers Theater ‹について 『関西大学文学論集』第30巻第4号 昭和56年3月(1981)
- Max Piccolominis Idylle und sein zweifaches Verhältnis zu den „Vätern“ — Einige Gedanken zu Schillers *Wallenstein* — 『独逸文学』29 昭和60年3月(1985)
- J. M. R. レンツのリアリズムと喜劇の精神について—彼の『放蕩息子』を手掛かりに— 『独逸文学』35 平成3年5月(1991)
- J. M. R. レンツと現代—戦後受容についての一考察— 阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』平成5年12月(1993)
- 日本の大学におけるドイツ語教育について—根本的の大学論— 関西大学経済・政治研究所『研究双書』第96冊 平成8年3月(1996)
- マックス・ダウテンダイ『琵琶湖八景』管見—文学性と絵画性と— 関西大学東西学術研究所『東西学術研究所紀要』第35輯 平成14年3月(2002)
- J. M. R. レンツ受容史覚え書—後世詩人による再生の観点から—(1) 『関西大学文学論集』第54巻第3号 平成17年1月(2005)
- アルザスのJ. レンツ—とくに「ドイツ協会」との関連において— 『東西学術研究所紀要』第40輯 平成11年4月(2007)
- J. M. R. レンツ受容史覚え書—後世詩人による再生の観点から—(2) 『関西大学文学論集』第58巻第3号 平成21年1月(2009)
- ゲーテとレンツ—ドイツ文学史の一時代— 日本ゲーテ協会『ゲー

テ年鑑』第54巻 平成24年10月（2012）

学会発表

シラーの『群盗』について 関西大学独逸文学会、第39回研究発表会
昭和49年6月（1974）

シラーの『ドン・カルロス』について—フィリップⅡ世の悲劇に関する—考察— 阪神ドイツ文学会、第90回研究発表会 昭和54年1月（1979）

シュトゥルム・ウント・ドラングの市民劇—レンツとヴァーグナーの作品を中心に— 阪神ドイツ文学会、レッシング生誕250年記念シンポジウム 昭和54年11月（1979）

J. M. R. Lenz: Anmerkungen übers Theater 日本独文学会、秋季研究発表会 昭和55年10月（1980）

劇詩人 J. M. R. レンツ再考—レンツと現代— 日本独文学会、春季研究発表会 平成4年5月（1992）

農村改革者、J. F. オーバリーン牧師とアルザス 関西大学東西学術研究所、国際シンポジウム 平成20年5月（2008）

書評

永野藤夫著『疾風怒濤時代のドイツ演劇—若きゲーテ・シラーとその時代—』 日本独文学会『ドイツ文学』第71号 昭和59年10月（1983）

新刊紹介

Jakob Michael Reinhold Lenz: Werke und Briefe in drei Bänden. Herausgegeben von Sigrid Damm 日本独文学会『ドイツ文学』第82号 平成1年3月（1989）

辞書

フロイデ独和辞典 白水社 平成15年3月（2003） 執筆協力

事典項目

シラー 角川書店『世界人物逸話大事典』平成8年2月(1996)

教科書編集

現代学生のためのドイツ語中級読本 朝日出版社 昭和53年4月(1978)

小論・エッセイ等

『独逸文学』50号に思う 関西大学独逸文学会『独逸文学』第50号(渡辺有而教授古希・退職記念、50周年記念年号)平成18年3月(2006)
デトレフ・シャウヴェッカー氏を送る 『独逸文学』第51号(Detlev Schauwecker 教授定年退職記念年号)平成19年3月(2007)
関大独文60年—回顧、現状、そしてこれから— 『独逸文学』第54号平成22年3月(2010)

*

新しい大阪の顔—千里界限— 同学社> Laterne <62号(特集:大阪学会に寄せて)平成1年9月(1989)

ひとつの飲み方、歌い方—「アサヒ大学」のこと— > Laterne <76号(特集:京都学会に寄せて)平成8年9月(1996)

多彩だった板東俘虜収容所での「演劇」活動 鳴門市ドイツ館> Ruhe <12号平成17年7月(2005)

レンツの道 郁文堂> Brunnen < Nr. 436 平成17年12月(2005)

リーガ再訪 日本ゲート協会> Berichte <第49号平成20年6月(2008)

七十翁、ヴォージュを行く—レンツの道(その2)— > Brunnen < Nr. 489 平成26年10月(2014)

*

触れ合いづくり 関西大学教育後援会『葦』No.88 平成3年4月(1991)
平成四年度就職戦線と関大生の就職活動状況について 『葦』No.92 平成4年8月(1992)

平成六年度、関大生の就職活動 『葦』No.99 平成6年12月(1994)

語学の授業、いまむかし 『葦』No.119 平成13年8月(2001)

学生剣道界に関大旋風ふたたび 『葦』No.126 平成15年12月(2003)

講演

ゲーテとレンツー ドイツ文学史の一時代— 日本ゲーテ協会、ゲーテ生誕の夕べ 平成23年8月(2011)

文学のこころ、詩のこころ— 文芸を愛する—ゲルマニストの心情の吐露— 関西大学ドイツ文学会、研究発表会 平成26年11月(2014)